
ネクロフィリカ

紫雨 柚榴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネクロフィリカ

【NNコード】

N9314L

【作者名】

紫雨 柚榴

【あらすじ】

ジャンルをつけるならば、耽美派文学と成ります。

ネクロフィズム、デカダン、マゾヒズム、ナルシズム、ホモセクシャル……。

とてつもない異常感性を持つ女性の生き様を描いた物語。

私がこの小説で描きたいのは、残酷さでも狂氣でも、ましてやゴシックやデカダンスでも無い。我々芸術家が求めるものは常に完璧

な美である筈だ。『シックやデカダンスは言つなれば美学論理という手段であり、狂氣や残酷さはその一部に過ぎない。私は私なりの美学に基づいた完璧な美を、この物語の主人公に重ね、追求しようとしているのだ。

『ネクロフィリカ』

告白します。私は人間の屍体が好きです。それも生々しい死体では無く、痛々しい屍体。鋭く損壊した四肢が、安らかに腐乱した黄土色の肌が、淫らに露出した臓器が、好きなのです。ここでは判り易く損壊や腐乱という言葉を使用しておりますが、私にはこの損壊や腐乱こそが新たな美の形成だと思っています。華は散るから美しいのでは無く、散つた華こそ美しいのです。常に同じ形を保ち続ける事が出来る筈ありません。元々一般的に美しいものが、徐々に輝きを失つて来て、終わりが見えた頃合に、元の美しさの残骸とその後の痛々しさを同時に兼ね備えた、言わば全く別の存在に成る時。また輝きを失い、終わりを遂げたものが、元々の姿との関連性を見失い、新たな形が誕生した時。そこに在るのは終を迎えた塵ではなくて、ノスタルジーを感じる、残骸故の神々しさを備えた芸術なのです。

醜さを視ずに美しさを語る事は出来ません。世間一般で言う純粋な美しさの背景に常に有る、純粋な醜さとでも云いましょうか、美しさの根本にある醜さこそが、本来の美で在るべきなのです。それを云う成ればまた逆もしかりですが、私の性質位置は此方側でして、主觀を一般的に云い換えているだけで、論というものは本来常々この様なものでしじう。それに、私と性質が同じ方が居ない筈ありません。其方側が居るならば、此方側も居る筈なのです。それこそ美が有れば醜が有る様に。ともかく、デカダンスこそ至高の美。廃退こそ醜の創造的破壊で有り、また美の破壊的創造なのです。

生きた人間というものをよく観察致しますと、なんだかとても気味が悪いのです。胴体はただの肉の塊ですのに、ニコウと長く伸びたグロテスクな形状の両腕と腿と脛とでアンバランスな両足が、取

つてつけたように生えて居るではありませんか。頭に關しては、肉塊に寄生した巨大な茸に長い黴が生えてる様で、吐き気がするのです。右と左で異様な程のシンメトリーも不気味ですし、またそれらが当たり前のように考へていい精神にすら悪寒がします。しかも其れらが雑音を発しながらざわめき、街中を闊歩し、フラフラと蠢く。此の世はなんと恐ろしい所でしょう。人混みは人塵と言い換えた方が良いに違い有りません。勿論私自身の容姿すらもさながら、人型は何処かで氣味の悪い感じを受けておりましたので、勿論御人形等も、見ただけで背筋がゾッと震える程でした。

自身の芸術感性に気が付いたのはある日。それこそ秋季の心寒い、何処かもの寂しい時に、ジットリと重く重い霧雨が、景色をボンヤリとさせ、夕暮れの夕日も朧氣で、地獄の炎のようにコラリと揺れる、身体の芯まで陰鬱な曜日。天氣の所為か、夕方六時頃にも関わらず部屋の中は暗く、灯りを点けなければならぬほどでしたが、その時の私は暗い方が安心感がある気がして、灯りも点けずに部屋の掃除をしておりました。私には妙に潔癖な所があります、その上完璧主義で、机や棚等に少しでも埃が乗つてたりすると、居ても立つてもいられないのです。また使用していた家具等が適当な中古品で、それも良いものを出来るだけ安く揃える為、“いわく”のついた品々を買つていたようでして、その恐ろしい使用感をなるべく無くすべく、真っ黒に塗りつぶしたものばかりでしたから、否応にも汚れが酷く目に付いたのです。

黒い扉、木目すら見えない程ペンキの分厚く塗り込まれた扉。それほどまでに塗らなければ、その下の惨劇の残骸を消す事が出来なかつた程の様。その所為で数ミリ分厚くなつた扉は、閉める時のみギイと泣くのです。けれども私はその音が好きでしたから、いつも開け閉めして遊んでおりました。黒い本棚、本棚と言つても殆ど本は無く、母が趣味で集めた御人形のディスプレイとなつております。勿論私はこの棚の御人形が、夜眠る時に怖くて仕方がありました。黒い机、この机の表面は、上から一枚板をかぶせて釘で固定されていて、その上からペンキを塗つた物の様で、一度気になつてコツソリと剥がして見た事があるのですが、物凄い量の、刃物で切刻まれたような跡と、氣味の悪い黒い染みが広がつております。それは別段気にならなかつたのですが、その奥にビッシリと白蟻が巢食つておりまして、それらが一斉にワラワラと此方に向かつて來たので、恥ずかしながら、あまりの恐怖で失禁してしまつたの

を覚えています。黒い寝台、四方の骨組みは全て鉄で出来ており、丈夫な上に素敵な薔薇模様のアーチが模られていてたのですが、使っているうちに黒いペンキは剥げてきてしまいまして、そこには鎖を擦つたような跡が無残に刻まれておりました。この寝台の上でかつて何が行われていたのか、その想像こそが悪夢でした。黒い絨毯、逆に此れほどまでに部屋中が黒いと、最早全て黒にするしか無かつたようで、仕方が無くこの絨毯を使用していたようです。黒いカーテン、こちらも絨毯と同じ理由の様。薄らと同色で刺繡されたペイズリーの華が素敵なカーテンだったので、汚さないように、特に湿気にはいつも気をつかっておりました。そして、この黒い人形。私は人型が嫌いだと云う事は前述したと思いますが、この黒い御人形だけは特別でした。それまで御人形を怖がっていた私が、この人形だけには非常に興味を示したらしく、私が六歳の誕生日に母に買つて貰つたものでした。目の少し上で綺麗に切り揃えられた黒髪は、後ろの長さは足首まであり、黒いドレスのようなワンピースを着ていて、恐らく色を塗つていらないだけの真っ白な肌だけに、瞳孔の無い真っ赤な眼が妖しく光つていまして、その人間離れした、屍のような美しさに思わず見惚れてしまつたのです。私はこの人形にエミリーという名前をつけてあげて、とても大切にしていました。

私はこの人形の掃除に取り掛かるうとしていたのですが、部屋が暗く、しかも真っ黒な部屋ですから、拭こうと思つて手を伸ばした瞬間に、誤つてエミリーを落としまつたのです。ドサリという音がして、自己嫌悪に陥りながら、急いで落ちた辺りを探ると、なんとエミリーの首と、右腕が肘から、素敵にポツキリと折れてしまつたのです。この御人形だけはとても気に入つていて、思わず泣きそうになつたのですが、それより先に早く治してあげないといけない気がして、急いで手と首をくつづけてあげました。幸いにもこの人形はパーツを穴にはめ込むだけの簡素な作りでしたので、すぐにくつ付いてくれたのでした。

しかし、改めて見て私はアッと声を上げました。あまりに急いで

いて混乱していたのでしょうか、私はエミリーの腕と頭を逆につけてしまっていたのです。しかしながら、私は元に戻そうとはせず、暫らくその姿を眺めておりました。私は人型が嫌いでした。そのシンメトリーが、気味の悪い腕や頭の配置が。ですが、このエミリーはそのどちらも克服していたのです。メタモルフォーゼ、人体の変形・改造、不完全な体を完全の域に達する為に、無くては成らない現象が、その過程が私の手中にあつたのです。完全とまでは言えませんが、右腕が頭というアシンメトリーによつて、その黒髪は淫らに垂れ下がり、首の先では五つに割れた小さな手のひらが天に向かつて伸びる、少なくとも元より美しくなつたエミリー。そして更に、この部屋の全ての悪趣味な器具が、野蛮な行為の傷跡が残つた、名の通りゴシック的な家具達が、首と右腕が挿げ代わつたエミリーと共に、鎖の様に連なつて、私の心臓を雁字搦めにしました。この瞬間に、これらこそ私が本来愛すべきものだつた事に気がついたのです！私は日々、鮮血に塗れ人を磔にした扉をくぐり、バラバラになつた人体を飾つた本棚に置かれた本を無造作に読み、人肉の台所になつたであろう机で勉強し、鞭で拷問を重ねたであろう寝台で寝ているのです。そう思つただけで頭はポウと熱くなり、たつた今掃除した家具達と、右腕に頭がついているエミリーを、もう一度愛しむ様に、丁寧に拭きあげてあげました。それは私が九歳の時でした。

ネクロフィリカ 2（後書き）

この黒い御人形の名前、エミリーは、御存知『エミリー・ザ・ストレンジ』のエミリーから来ております。丁度エミリーの絵本の続編（？）にあたるお話『エミリーと記憶喪失ワンドーランド』を読んだ直後に書いたものなので、影響受けちゃいました。（笑）

冒頭の描写は、エドガー・アラン・ポー著『アッシュレー家の崩壊』をパクつて参考にしております。

私が小学校高学年。年は確か十一の御話です。その頃は身体の発育も儘成らない不完全な女でしたので、当然の如く精神・美学等は未熟そのものでした。というのも、適当に廃退したものを見ては、意味も良くわからないままにそれを好み、収集しておりまして、女郎蜘蛛を沢山、ビン詰めにして飾つて置いたり、猫の屍骸が腐つて行くのを観察したり。ともかく、そのイレギュラーな様は良く人目につくようで、クラスメイトどころか御近所からも氣味悪がられておりました。勿論父母にも酷く叱られましたが、その頃の私には意味がわからず、その上反抗期でしたから、反省していない振りをして、ひたすら廃墟を見て回つたり、人形の首を挿げ替えたりして遊んでいました。親が関与して来ないと何処かで知つたのでしょう、それまで学校では悪い意味で一目置かれていただけでしたが、気が付けば靴箱に靴が無かつたり、ノートが破かれていったり、登校すると机が無かつたりと、陰湿ないじめを受けるようになつたのです。確かに、互いに同調しながら生きていく人間に対し、私は余りに異端でありました。そもそもまだ十一歳ですのに、未熟な理論を唱えながら廃退こそ美であると語りましても、分かつて頂ける筈はありませんし、人間の社会合理主義からして、指向性の違う者は排除されるべきなのでしょう。即ち、いじめを受けるのは目に見えた結果だったのです。当時の私も何と無く、普通の感性を御持ちの方とは共存出来ない事には気が付いていて、やや呆れ気味な、諦めの様な気持ちがあつたので、特に反抗もせずにその行為を受けておりました。しかしながら、私がこの話を持ち出したのは、同情を惹いて御涙頂戴と言う為ではありません。私にとつていじめは、また一つ自身の特殊な感性に気が付く大きな切欠に成りましたと同時に、詳細は後述しますが、いじめそのものが非常に喜ばしい事であつた為、寧ろ感謝し

ている位なのです。つまりこれは、どちらかと言つて自慢話に成つてしまします。

その特殊な感性というのが被虐欲、つまりマゾヒズムだったので、私なりの見解としては、それが特殊なものだとはどうしても思えないのです。考えて見て下さい。クラスメイトとの絆が、いじめに抛つて保たれていただけの事なのです。つまり、いじめられる子というポジション、即ち私の立ち居地、居場所が、別段何もしないとも常に確保されていたのです。御蔭で安心して学校に通う事が出来ましたし、慣れてしまえばそれは一連の、ただのコミュニケーションに過ぎないのです。例えば、給食に雑巾を投げ込まれる。私が泣き出す。いじめつ子が喜ぶ。この流れは相互理解の上成り立っているのです。ここで私が泣くのも、計算上での事で、反抗してしまえば亀裂が生じる事はわかつておりました。言うなれば私をいじめる子達は良き友人でした。そう思うと、本当にいじめがコミュニケーションの一つと成ってしまいますし、機嫌が悪ければ泣き出してしまう、それだけの事でした。そして、私が本当に何も反抗しないで、平気な顔をしていると、それが面白く無かつたのでしょうか、いじめは次第にエスカレートして行きました。先程提示した例の様に、精神的なものには飽きてしまったのか、足を引っ掛けで転ばせる、徐に殴られる、髪を引っ張る、刃物で切り付けられた事も有ります。しかし、言つまでも無いとは思いますが、私はそれを望んでおりましたので、寧ろよろこんで我が身に痣と傷を刻んでいきました。

更に、そうしている内に、私の身体はより強いいじめを要求するようになってしまったのです。精神的な屈辱は殆ど全て慣れてしましましたので、精神的なものよりも言葉の暴力、言葉の暴力よりも肉体的な暴力を、暴力ならば素手では飽き足らず武器を、鈍器よりは刃物を、望めるならば刃物よりは銃器を、銃器よりは爆発物を。一時的なものよりは継続的なものを、炎で炙られる事を、硫酸に溶かさ

れる事を、ゆっくりと咀嚼するような刺激を、求めました。それはまるで、朝日の中で自然と覚醒し、小鳥のさえずりが聞こえて来た時の様な、ウットリとしてしまう程の恍惚とした、甘美な快楽。そう、快樂でした。私は多くのいじめを受けて来ましたが、それらを全て受け入れる事によつて、心の中が浄化されていくような感覚を覚えておりました。自ら動く事の無い、受動的な女こそ、清楚可憐な心の美しさを持つのです。内面の美しさは外見にも滲み出来るでしょう。事実、私はドンドン美しくなつていたのです。肌はより透き通つた白になり、髪は艶を増していました。それにより一層嫉妬の感情を燃やした相手は、激しさを増して私をいじめにかかります。それは再び快樂と安堵を生みます。素晴らしい良循環。これが快樂以外の何で有りましょうか、まさにいじめこそ私を幸福に導いてくれる、一番効率的かつ効果的な手段だつたのです。

しかし、有る時私は判断を誤つてしましました。それは太陽の照りが強く、目が焼けてしまいそうな程燃え盛つている夏の日。私はより強い快樂を求めるあまり、私を良きいじめて下さる友人に、思い切つて鈍器で殴つて欲しいと懇願したのです。御願いをする事なんて初めてでしたので、出来るだけ必死に、狂つた様に地面に土下座をしながら、頭で地面を擦つて、これで殴つて欲しいと、自らの椅子を引っ張つて来ては、無理やりその子の手に椅子を持たせ、その前に跪いて、目を輝かせてずっと待つてありました。戸惑う友人の椅子を持つ手を取つて、大丈夫だからと、そのまま一度二度自身を殴つては、また行儀良く跪いて、その凶器が思い切り振り下ろされるのを、ずっと待つておりました。私はきっと殴つてくれると信じていました。それが私達の友情であり、相互理解の唯一の方法でしたから。しかし、そう成りませんでした。友人は何度も泣きながら謝り、走つて逃げてしまつたのです。私は呆然と成つて、徐々に廊下の向こうへ消えて行く友人を眺めながら、涙を流し、深く深く反省致しました。考えてみれば当たり前の事でして、今まで在つた筈の受動的故の内面的な美しさが、欲望に駆られ、つい見せてしま

つた積極性の所為で、完全に崩壊してしまったのです。友は、美しさを無くした私に愛想を尽かしてしまったに違いありませんでした。

そんな事があつてから、私へのいじめはピタリと止んでしまい、別の対象へと移ってしまったのです。私は大きな失望と、それまであつた居場所が無くなってしまった為、学校へは行かなくなりました。しかしそれも卒業間近の事でしたので、スンナリと中学校へ上がる事が出来ました。そして、またいじめられるかも知れないと、希望を抱いてはソワソワしておりました。

中学校に上がり、期待していたいじめを受ける事はありませんでした。しかし、それが残念だとは思つておりません。何故なら、いじめ等という行為を受けなくとも、より私を幸福に導いてくれる事態が起こっていたからです。そもそもいじめというものは、誰から受けなくては意味が成り立つことは無く、またいじめをする方は、社会的制裁を受けるかもしない事を覚悟しなくては成りません、それなりの勇気が無くては出来ないものなのです。即ち私が小学生の頃は本当に運が良く、いじめてくれる友は掛け替えの無いもので、ついに無くしてしまった私はなんと愚かなでしよう。常にいじめを受ける事を期待して待つっていても、勇気ある相手が居なくては意味も無く、前回の失態がトラウマで、こちらから頼むのも憚られます。相手が居なくとも幸福に成る為には、驚異的な自己愛が必要ですし、私はその時自分を愛する事は出来そうにありませんでした。人が完全な意味で独立し、幸福に成るための条件とは酷なもので、並の人では不可能に近い事なのです。だからこそ孤独を恐れ、誰かと共に居ようとするのです。リスクは有りますが、その方がより簡単に、自らを幸福に高める事が出来るからです。

私がこの事に気がついたのは、私に本当の意味での友達が出来たからです。友達が居るという事は、ただそれだけで自らを幸福だと思わせてくれます。本来の意味とは多少違いますが、ある種の自己満足で幸福に成る事も出来ます。友の質が高ければ高いほどに、自らの感じる満足度も当たり前の様に増して行きますので、私はそういう意味で、恐らく最高の幸福を手にしたと思つております。私の友は、同性でも目を惹かれてしまうような美しい女友達で、その精神はまるで聖母の様に清んでおりました。私がここで使つた“清んでいる”というのが、道徳的であるという意味では無く、道徳や社会性、理性という不純物の無い、最も人間本能に忠実な事を指して

いるといいのは、最早云うまでも無いかと思います。私の友達 友達というよりは、寧ろ大親友、最早家族、イエ、一心同体と言つても過言では無い程に、私達は物理的にも、精神的にもいつも一緒にした。互いに求め惹かれ合い、共に幸福や、悲劇をも分かち合つた彼女を語らずして、私の存在は成り得ません。彼女の本名をここで明かしてしまつては失礼だと思いますので、ここは仮にクレアという名前だという事に致しましょ。彼女は私の廃退趣味や怪奇趣味を理解してくれる処か、確固たる理論を持つております、良き師でもありました。思えば、私が語る理論の底辺を作つているものは、クレアの理論でもありますので、彼女は私を形成する最も大切な要素で有つたと言えます。

少々特殊な理由はありますが、彼女は学内でも一・二位を争う程の美貌を持つておりました。私は世界中でも上位を争えると思っておりましたが、クレアは貴女がそう思つてくれてているだけで十分と言つておりました。その理由というのが、クレア自身でも語つていましたが、身体全体的に色素が薄いようとして、その所為で髪は金色よりも更に薄い、銀や白髪に近い白金色、身体の色も同じように薄かつたので、血管は静脈が生々しく紫色に浮かび上がり、肌の色は生氣の無い、病人の様な蒼白さでありました。更に驚くべきは瞳の色で、それがなんとも美しい朱色なのです。白金色の髪と病的な白さの肌、そして真っ赤な目。なんという神々しさでしょう。私はクレアを初めて見た時、地上に天使が歩いているとさえ思いましたから。しかしその美しさは、何も彼女の色が特殊で、目を惹いたからではありません。クレアには仏蘭西の血が少しばかり流れているらしく、彼等特有の特徴的な高い鼻と大きな丸い目を持つており、髪はやや波のある巻き毛で、いつも黄昏た様に目を伏せていためか、自身の厳かさや淑やかさを際立たせておりまして、その特異な体质を抜きにしたとしても、十分過ぎるほどに美しかったのです。ですから私が彼女に惹かれるのは略必然でありまして、薄倖さすらも感じる純白のクレアに魅力を感じ無い筈がないのです。勿論の事、

私だから惹かれたのでは無く、周囲の方々にもその美貌は絶賛されておりました。事実、クレアと居るとすれ違う誰もが振り返りますし、呆然と成つて立ち止まつてしまふ方も少なくありませんでした。私が運良くクレアと仲良く成れたのは、自身の異様な 異様だとは思つておりませんが 感性と趣味のお蔭というのを前述致しました。クレアも私と同じようにゴシックやデカダンスの美学を愛し、その美を求めて止まない、至上の耽美主義者だったのです。これは何たる偶然でしょうか。私は彼女と出会うべき運命だったので。その上出逢つた場所も、これまた素敵な場所でして、御伽噺の様なあまりに良く出来た巡り合いで、神の作為か悪魔の悪戯かとすら感じる程でした。

この出逢つた場所というのが、学校の本棟の裏にひっそりと放置されている植物園でして、私は初めて見た瞬間からこの場所が気に入つてしまい、毎日のようにこの植物園に遊んでいました。外見は天辺から円錐状のアーチを描いた、巨大な鳥籠の様な形をしておりました。どの位長い間放置されていたのかは知る事が出来ませんでしたが、薦が伸び放題に成つており、鋸びた鉄の格子を縦横無尽に跨いでおります。元々は薔薇や百合等の美しい花を植えていた事が、腐つた木の看板から辛うじて読み取れます。それらは全て枯れてしまつた様で、茶色く成つた華の残骸らしきものが、規則正しく列に成り、沢山土に刺さつてありました。私は行儀良く並ぶ華が直立しながら、首だけ擡げて死んでいるのを見て、絞首刑を思い浮かべていました。しかし華は殆どが落ちてしまつて、斬首刑かもしません。花弁がバラバラに成つて茶色く変色しているのは、処刑人が落ちた頭を何かで潰すか、高い所から落とすかして、肉片が飛び散つていき、それが腐つていったものなのです。

嗚呼、華も人も変わりは無く、例え一時の栄え時に、最高の美を誇つていたとしましても、それはいつか廃れ、棄てられるのでしょうか。廃れなくとも飽きが来るでしょう。美に永遠がある筈も無く、見限られた者に最早容赦も無いのです。この植物園は正にその収束

モデルです。華を糧として、薦が生い茂り、ついには自分勝手に光を独占しようと、天井までもを塞いでしまい、華の変わりに、そもそも光を求め無い、醜いドクダミ等の雑草が盛つております。このように自然界では、常に卑怯で醜い者が勝利するのです。先程申し上げた通り、これは華も人も変わり無く当て嵌ります。更に面白い事に、今現在、自然界で一番栄えているのは紛れも無く人でしょう。結論を言うまでも無いとは思いますが、人こそ醜さの頂点に立つ、最も卑怯で悪質な存在に決まっているのです。

サテ、何時の間にか論じていたデカダンの話はこの位に致しまして、話を戻しましょう。私がクレアと出逢ったきっかけです。忘れもしません、まだ入学して間も無い春の終わり頃、生徒達が慣れずギクシャクとしていた時に、私はこれまでの経験から、当たり前のように一人で過ごすと決めておりましたので、解放的な気分で校内を闊歩していました。確かにその日は天気が良く、本来ならば日差しが嫌いな私でも、何故か気分が晴れやかで、素敵な事が起こりそうな気がしていました。私が学校の休み時間に、いつもの植物園で猫の屍骸を見つけ、あまりに可愛いので、それを眺めながらランチをしている時。植物園の錆びた扉がギリギリと開く音がして、一瞬講師の方かと思つて私は硬直したのですが、その人物を見てはすぐに違うと確信し、同時に驚きの余り御弁当を落としてしました。なんと入ってきたのは戦慄する程に美しい屍体だったのです。クレアでした。その頃は全く他人を気にしておりませんでしたので、クレアが既に校内で大分有名だつたにも関わらず、姿を見たことが無かつた私の驚きは、最早言葉で形容出来ません。

余りに驚いて反射的に立ち上がったのですが、そのままどうして良いかわからず、目線だけをひたすら泳がせていると、猫の屍骸が私のお昼御飯を被つているのを見つけ、その瞬間グウと御腹が鳴ってしまったのですから、もう私は恥ずかしさと驚きと美しいクレアと、何が何だかわからなくなってしまって、ただ涙がポロポロと落ちました。このデカダンな空間に美し過ぎるクレアが存在すると

いう強烈なシユルレアリストは、私の感動のキャパシティを超えており、頭が完全に混乱してしまったのです。

「御免なさい」と、美しい声が聞こえて来たのですが、中々涙が止まりません。きっとクレアは、自分の所為で私が御弁当を落としてしまい、それで泣いているのだと思っているに違いありません。そうでは無いのに、否定する言葉も見つからず、ただ涙が出るばかりでした。またクレアもどうして良いのかわからない様で、きっと罪悪感からか、可哀想な事に彼女も泣き出してしまい、そのまま二人で泣いていたら、何時の間にかお昼休みは終わっていた様でして、後で二人一緒に怒られてしまいました。これが私達の運命の出会いだったのです。

ネクロフィリカ 4（後書き）

ちなみに、クレアの名前の由来はマルキ・ド・サド著『悪徳の榮え』に登場するジヨリエットの友達、クレアウイルから来ております。

実はこの小説、『悪徳の榮え』をやや参考にして書いているのですが、中々に無理がありますね……。精進しなければ。

* 6／23 読み返すとあまりに酷かったので、ちょっと修正しました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9314/>

ネクロフィリカ

2010年10月14日19時03分発行